
山頂にて

tensuke

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

山頂にて

【Zコード】

N5122C

【作者名】

tensuke

【あらすじ】

雪山で映画撮影に挑んだ俳優が遭遇する不思議な出来事

(前書き)

俳優の玉木宏さんをイメージして書いています
BL的な表現を含みますので
気分を害されそうな方は「遠慮下れ」

1・吹雪

「これで・・・生きて帰れたら 記者会見で絶対話そうな雪山で遭難するってこういうことかって・・・実感したって」

彼は少し無理をしたような それでもいつも優しい瞳の笑顔で言った

寒さに身体のあらゆる場所がこわばり 痺れたように自由が効かないそれでも僕を安心させようと 彼は必死の笑顔を作ってくれたのだ

うひうひと思つ

一回りも歳の違う頼れる先輩 彼は僕を気遣つて歩みを止めたばかりに

こうして白い怪物に取り囲まれて身動きを奪われた
僕さえあの時しつかりと歩けていたら

いや彼に無理にでも先に行つてもらえばよかつた

今さら悔やんでも仕方がない

それでも僕は悔やまれてならなかつた

僕と彼はテレビドラマや映画で顔を知られる俳優だ

大掛かりな雪山での映画撮影に備えて 事前訓練合宿と称して山に入つた

山頂を目指して山小屋を後にした時には 山の空は美しく晴れ渡つていた

太陽の日差しが雪面に反射し 眺しい程の明るさだった
それが あと少しで山頂という辺りに差し掛かった頃から
あつという間に太陽は厚い雲に覆われてその姿を隠した
そして 僕らを吹雪という名の白い怪物が襲つた

先頭を歩くガイドは山のエキスパートだった
ガイドの指示に従つて 僕らは無理のないスピードでとりあえず山
頂を目指す事にした

山頂以外に 吹雪から身を守れる小屋はなかつた
吹雪は徐々にその風を強め すぐ前を歩くスタッフの姿さえ薄く白
く隠し始めた

離れないようにはぐれないように必死で歩いた

それなのに
げ始めた
事もあるつか僕の靴の紐が徐々にほどけ足の運びを妨

僕はその場に屈み込むと急いで紐を結び直した
しかし専用手袋をはめた手は寒さでかじかみ思

もどかしい程に紐ははらはらと指の間を滑り落ちて上手く結べない

「大丈夫か？」

彼が立ち止まり 声をかけてくれた

「すみません すぐ・・・です 先に
「いや・・・持つてゐるから 急いで
「先に行つて下さい」

「すみません」

つた
そして
僕と彼が立ち上かつた時
辺りは真っ白な怪物の腹の中だ

「……」

彼の声は周囲の白い壁に吸い込まれるように叫ぶ側から小さく消えてゆく

先行するガイドと最後尾を行くガイドに挟まれて 僕ら俳優は歩いているハズだった

しかし 今 僕と彼の後ろにはガイドの姿もない
そして 前にも残りのスタッフ達の姿もなかつた

「・・・・・ 視界が悪すぎるな・・・ 下手に動くと危険なんだろ？が・・・」

彼は一時思案するように俯いた しかしそうにその顔をあげると僕に言った

「このまま雪の中に立ち尽くしていたら凍えるのも時間の問題だ・・・
どこか 少しでも雪をしのげる場所を捜そう」

「はい・・・ すみません 僕のせいです・・・」

「いや・・・ それはいいから せめて一人はぐれないように行こう

「はい」

そして 僕と彼はお互いの身体をロープで繋ぎ 足を深い雪に取られながら

頭を低くして 顔に痛いほどに吹き付けてくる雪を受けながら
斜面を横方向に歩き始めた

そして何分程歩いたどうか・・・ 僕らは一軒の山小屋を見つけた
それは忽然と僕らの前方に現れたように見えた

その山小屋の周りだけ 雪が風に吹かれずに静かに舞つていた

「あそこに入ろう」

先輩である彼の言葉に従うべきである事はよく判つていた
しかもこの天候の中である 吹雪をしのげる場所にたどり着けたのはラッキーだらう

それなのに 僕はこの山小屋に入るのがなぜかとてもイヤだつた
首筋の後ろがちりちりと総毛立つような不安を感じていた
何か奇妙な 不可解な不安に僕は取り憑かれていた

2・山小屋にて

僕と彼は山小屋の中に入った

そこはとりあえず吹き付けてくる吹雪をしのぐ事ができる場所だったしかし残念な事に 小屋の中には暖をとれるような物は何もなかつた火を炊くための薪も火種もランプも 当然 電気もなかつた

僕と彼は唯一小屋の隅に積まれていた毛布をそれぞれの身体に巻いて壁にもたれて座り込んだ

歩き疲れた足がじんじんと痺れたように痛んでいた

「 そりだつ！携帯電話・・・」

「・・・この天候では無理だろう・・・」

「・・・そう・・・ですね・・・圈外です」

「 そりか・・まあ 山の天候はすぐ変わるから またすぐに晴れるかもしねれない」

「 そうですね・・・」

「 大丈夫だよ」

彼は僕に笑顔でうなづいて見せた

小屋の中は明かりもなく薄暗く 外の吹雪の音が気味悪い獣の遠吠えのように響いていた

「 無事に山を下りられたら 記者会見で必ずこの話をしような」

そう言って彼は笑つた 僕はそんな彼の笑顔に救われた気持ちだった僕はとりあえず吹き付ける風から逃れて緊張の糸が切れた毛布をかぶつて座り込むと まもなく睡魔の誘いに抗えずうつらうつらとし始めていた

はじめ 僕は夢を見ているのだろうと思つた
それは僕の周辺視の中で 彼の上に覆い被さるように彼の顔を覗き込んでいた

• • • ! ? • • • • •

僕は それ が彼の - 彼はその目を閉じて眠つて いるようだつた - 唇に何か白いものを

吹き込もうとしているのを見た いや 見たような気がした
ほんやりとした思考の中で 僕は それ がゆっくりと振り向くの
を見た

それは白い陰のようなものだつた

(・・・・雪女?・・・・) まだ夢の中にいるよつた頼りない感

無の世界で母なる観

それ
はゆつくりと立ち上がると僕の方へと向き直った

人間の形をして いる よう にも 見える しかしその輪郭は白くぼやけ
顔 が ある べき 場所には 白 に も 銀色 に も 見える 一 つ の 光 が 禍々しく
舜 い て いた

用
一
レ
ナ

その顔はいたずらにモンタージュ写真を作つてゐるよつに
その目がその鼻がそしてその口が次々と様々な形と色に変わつ
てゆき

一向ひとりの定まつたものに落ち着かない

僕は それ を見つめるうちに乗り物に酔つた時のような不快感と
眩目を感じた

たまらず 僕は目をきつく閉じた
その刹那 それ の声が僕の頭の中に響いてきた

3 死神または妖魔

（お前は俺が見えるのか・・・）

• • • ! • • • •

（お前は、俺が、見えるのか・・・）

それは、僕の頭の中に直接響く声だった。僕は目を見開き、それを凝視した。

しかし、それは変わらず、輪郭をぼやけさせたままめまぐるしくその顔を変化させていた。

たまらずもう一度、僕は目を閉じた。

（そうして、いるのが賢い・・・俺の姿は相手が決める。目では見えぬ）

「・・・な・・・なんなんだ・・・」

（俺が何なのか知りたいのだろう）

「・・・！・・・」

（お前には俺が見えるらしいな。久しぶりだ。）うして話し相手に出会えるのは

「・・・せ・・・先輩に・・・何を・・・何をしたつ！」

（くつくつく（笑）お前の思った通りの事をした）

それは低いよく通るとても甘い声でそう言った。
僕は雪女の物語を思い出していた。先輩は命を吸い取られてしまつたのだろうか・・・

（心配はいらん。お前次第でこやつの命も、お前の命も奪いはしない）

「ぼ・・・僕次第・・・？」

（俺を見ろ）

その声に誘われるよに、僕はきつく閉じていた目をゆうくつと開いた。

そこに、それは居た。僕の目は確かに、それを見ていた。

それは薄暗い小屋の中でもはっきりと見えるほど、その身体にほんのりと光をまとっていた。

しかしその光は妖しくゆらめき、決して太陽のそれではなかった。

どこか月の明かりに似た 青白い光だった

それは静かに僕の方へやってきた

歩いているのとも違う 床の上を滑るように近づいてきた

それの青白い光をまとつた それでいて 中心部は深い陰のような漆黒の姿

それは背の高い若い男だった それも とても美しい男だった 黒い長いマントらしきものを羽織つて すらりとした手足の長い 均整のとれた体格をしている

雪のように白い額に黒く艶やかな柔らかそうな髪がかかつて いる 細い鼻梁が美しく顔の中心を走り それに続いてふつくらとほの紅い唇

その美しい唇の両端が軽くつり上がり 冷酷なアルカイックスマイルを浮かべている

こちらを見つめている瞳は大きく そして黒く潤んだように煌めいている

長い睫に縁取られたその瞳は 優しげでもあり また同時にたまらなく冷たくも見えた 美しい形の眉を軽くひそめた陰がその端正な顔立ちを少女めいたものから遠く引き離している

雪女・・・いや 黄昏の隙間から忍び出でくる妖魔 そのあまりにも整いすぎた姿は

浮世離れして この世のものと思われず 妖しい気配を濃厚にふりまいていた

しかし 僕は それが そのほの紅い美しい唇をにやりとつり上げて微笑んだ時

背筋に冷たいものが走り 身体が小刻みに震え出すのを禁じ得なかつた

僕は それ の顔をとてもよく知っていた とても身近によく見知つた顔

聖堂の天使のように美しく 黄泉の国の魔王のように妖しい美貌 それは鏡の中に見知った 僕そのものだった

4・対話

それは僕の正面にいた

そして それはあたかも鏡の中を覗くように 僕の姿そのものにして そこにあつた

僕は自分の目が視力を失い 幻を見つめているのかと何度か瞬きをした

しかし それは変わらずそこにあり その周りに鏡の境界もその縁取りもなかつた

それは低くよく通る甘い声で僕に話しかけた

「自分の声で話しかけられるのはどんな気分だ?」

「あまり・・・あまり気持ちのよいものじゃない・・・・・」

「(笑) そうか・・・ そりゃうな

「なぜ・・・なぜ 僕の姿なんだ?」

「お前じゃない 僕だ」

「・・・?・・・」

「お前は俺で 俺がお前だ」

「な・・・なにを言つているのか・・・ 判らない」

「くつくつく・・・ ホントに? お前は今までホントに自分を知らずにいたのか?」

「自分を? 知らずに?・・・」

「まあ いい ようやく「ひやつひやつてお前から」今まで来たんだ どれだけ待つたか」

「待った？ 僕を？」

それは僕の両手を掴み立ち上がりさせると 静かに顔を近づけ僕の唇にその唇を重ねた

その唇はふつくらと柔らかかつたがとても冷たかった

その冷たい口づけは僕の頭の芯をも凍らせた

僕は瞳をとじた 膝から力が抜けた

がっくりと倒れ込みそうになる僕を それは抱き留めて支えた

そしてそのまま僕を強くその胸に抱きしめた

再び重ねられた唇の感触と冷たい吐息を首筋に感じながら

僕は意識を失った

暗闇の中で声だけが響いていた

（お前には特別な力がある・・・『氣づかず』にいたのなら『氣づかせてやる・・・』）

「・・・特別な？ちから？？」

（お前に心奪われて お前に恋い焦がれて 叶わぬ想いに身を焼かれる思いで過ごす者

お前はそれらの者に『氣づかず』に 本当に『氣づかず』にいたのか・・・

（「僕に・・・恋いこがれる？？」

（そう・・・お前に想いを寄せる者たちに お前は残酷な微笑みと優しさを与えて

それがより一層の苦しみになる事を知らず・・・そうして ただ氣づかずにはいた・・・）

「氣づかずにはいた・・・」

（「己の心と対話してみるがいい 本当に『氣づいていなかつたのか？本当に知らなかつたのか？ お前の本当の心は 残酷に冷酷に自分を慕う者の心を握りつぶす）

「そつ・・・そんなつ・・・」

（そんなことはないと くつくつく（笑）そつではないというのか？
それでは ここで眠るこの男はどうだ・・・自らの命にかかる瞬
間に

この男はお前のために歩みを止めたぞ（笑） お前はこの男に何を
した？）

「なつ・・・なにを・・? 何もしゃしない 僕は何も・・・」

（そう そのお前の純粋な無垢なそして素直で悪意のない優しさと
美しさが（笑）お前の罪だ）

「・・・罪？・・・」

（美しきもの 崇高なるもの 高貴なるもの そしてそれは数奇な
りて儚いもの愚鈍なるもの（笑）

「なぜ・・・なぜ 僕が？」

（答えは いづれ自ずから見えてくる お前は俺を受け入れればよ
い それだけだ）

「お前を・・・受け入れる？それは どういづ意味だ？」

（お前も そして お前に魅入られた者たちも 苦しまずにする
シアワセになれる

そういう事だ（笑） 僕はお前が俺を見いだす口を待つていたのだ
待ちわびた もう離すまい）

声は消えた 僕の意識の暗闇は果てしなく続く漆黒の闇に取り込まれ
散り散りに碎けて消えた

5・生還そして変貌

「おいつ！ しつかりしろつ！ 大丈夫か？ おいつ！」

僕は頬を叩かれる感触と耳元で聞こえた声に目を開けた

それは吹雪の中はぐれたスタッフとガイドたちだった

「せ・・先輩はつ？」

僕は飛び起きたと辺りを見回してその姿を捜した

「大丈夫 彼も一足先に病院へ運ばれたから ちょっと体温が下がつてたけど

命に別状はないらしい 安心して それよりも君も病院へ行こうさあ・・・」

そういうて 僕はスタッフに抱えられるようにして担架に乗せられた救急車というものに生まれて初めて乗った

救出された安堵から 僕は病院へ着くまでもう一度意識を失った

次に目を覚ましたとき 僕は病院のベッドの上だった

隣のベッドには先輩の姿があった

彼も随分と疲労の後が見えるものの すっかりと元気な笑顔を取り戻していた

僕にいつも優しい笑顔を向けると 穏やかな声で言った

「今度の記者会見は 雪山で遭難するつて事を実感したつて是非とも話さなくちゃならないね（笑） もつと君とゆっくり話もしたかったのに

とんだ目にあつたね お互い まあ 無事で良かつたよ本当に 君が無事でよかつた」「

（君が・・・無事でよかつた・・・）

彼の言葉に僕の胸が高鳴った 今までにない鼓動を自覚して驚いたなぜ ただそれだけの言葉にこんなにも自分は狼狽えるのか・・・。彼に笑顔で それもかなりぎこちない笑顔で 頷いてみせるのが精一杯だった

僕と彼は あの吹雪の中 はぐれたスタッフとふもとの山小屋に残つていたスタッフが

連絡をとりあい 必死の捜索をした果てに 山頂にほど近い斜面にできた狭い洞のよつな

場所に身を寄せ合つて いるのを発見された そ うだ

二人とも意識はなく衰弱して いたもの の 幸い 大きなケガや凍傷も
なく

こうして無事に生還を果たした と いう事だつた

次々と僕らの病室にはお見舞いに知人の俳優や友人たちが詰めかけた
口々に 無事でよかつた 何よりだつたと僕らの生還を喜び
早く撮影に戻れるように体力を回復してくれと 励ましの言葉をか
けてくれる

ゆつくり静養して 早く現場に帰つてこよと肩を叩いてゆく者も
いた

僕はそれにただ笑顔で ありがと うと 答えた

それが精一杯だつた

僕の耳には 病室に詰めかけた人たちの 声にならない声が聞こえた
それは大概 その人の話す言葉に重なつて僕の頭に響くよ うに聞こ
えてきた

「ゆつくり静養してね」 そう言つたスタッフの女性は（彼の唇・・・
紅くて綺麗）と呟いていた

「早く現場に戻つてこいよ」 そう言つた共演の俳優は僕の肩を叩き
ながら

（この清楚な美人顔にこの身体は卑怯だよなあ いい身体して るな
あ・・）とため息をついていた

何より僕を狼狽えさせたのは 憧れに似た淡い恋心を切なくさせや
いてゆく女性達ではなく

僕に対して 僕の肉体とこの顔立ちに明らかに欲情を覚え その胸
の下に組み敷く事を妄想し

自分でもその思いに戸惑い 悩む 男性たちの心の声だつた

彼らは見舞いの言葉の向こうで（お前を抱きたい お前を抱きたい）

と叫んでいた

僕はその叫びに狼狽え そして言い知れぬ恐怖を感じた
彼らの内なるその叫びは 僕の脳裏にまざまざと彼らの腕に抱かれる己の裸身をも

生々しく写し出し 僕を苦しめた

それが 今まで何の疑いもなく親しく友人として接してきた者であればあるほど

僕は自分の存在を恨めしくさえ思うようになつていった

一刻も早く 一人になりたかった

誰も訪れる事のない 自分の部屋に一人つきりで ゆっくりと過ごせる時間が欲しかった

僕は病院で ほとんど口を聞かなくなつていた

それは隣のベッドの先輩をとても心配させた

彼の内なる声だけは その口から聞こえる言葉と寸分違わず

僕を安心させた 彼は心の底から僕を心配し そして純粹な好意をもつて接してくれていた

見舞客が帰った後のひとときが 僕の唯一の休息の時だつた

6・そして内なる それ と共に

退院してしばらく 僕は自宅での療養として1週間程の休みをもらつた

一人静かに過ごせる時間はとても平和だつた

家族の声は 今までと何ら変わる事なく 僕を大切な家族として
息子として兄として 思い気遣つてくれるものだつた
それは 僕を大いに安心させてくれた

家族の暖かい心遣いに包まれて 僕はこの休みでどうにか心の平静

を取り戻した

そして あの雪山へ戻る日が近づいた 今度は映画の撮影がいよいよ始まる

3ヶ月に及ぶかもしない長丁場になるだろう
僕は山ごもりの準備を始めた

使い慣れた身の回りの品々をザックに詰め 常備薬も持つてゆこうと洗面所の棚を探つた 目的の薬の瓶を手にした時

僕は視界の端にある鏡に映つて いる自分の姿に背中が凍り付いた

それは こちらを見つめて その紅い唇の端をにっこり上げて

不気味なアルカイックスマイルで微笑む僕の顔だった

それは恐怖に怯えて引きつった僕の顔ではなく

冷酷な不思議な微笑みをたたえて こちらを見つめていた

僕は鏡を正面から見据える事ができないまま

洗面所から逃げるよう飛び出した

背後で くつくつ という密やかな笑い声が聞こえた気がした

迎えに来てくれたスタッフの車に乗り込み 僕は撮影現場の雪山へ旅立つた

僕は同乗しているスタッフ達の声を聞くのが怖くて仕方がなかつた
だから すぐに普段は飲まないような酔い止めの薬を飲んで

無理矢理に睡魔の訪れを待つ事にした

ほどなく 僕は眠りにつく事に成功した

僕は現場へ到着するまで熟睡した

7・妖魔の囁き再び

撮影が始まった

それは厳しい現場だった 絶好の撮影日和はすなわちほどよく吹雪

なのだ

僕はこの白い雪に取り囲まれる吹雪がとても怖かった
以前は雪も雪山も 身体に辛くてしんどいけれど それでもこんな
恐怖はなかった

今は いつあの白い妖魔がまた僕を連れ去るかと 怖くて怖くて堪
らなかつた

「顔色が あまり良くないみたいだけど・・・大丈夫?」

僕に「コーヒーのカップを差し出しながら かの先輩が声をかけてく
れた 優しい眼差しが暖かい

「すみません・・・大丈夫です」

「無理しないように ね」 僕の隣の椅子に腰掛けながらそう言った
穏やかな笑顔で僕の顔を見つめる

僕は自分の鼓動が早くなるのを感じ それを気取られやしないかと
思わず彼の視線から目をそらして俯いてしまった

彼の言葉に嘘はない 彼の言葉はまっすぐに そのままの言葉で僕
の心にも響く

他意のない好意を感じる それなのに 僕の中で何かが囁く
(この人と居たいんだ この人の腕の中に抱かれたいんだ この人
の・・・)

「・・・ちつ！違うつ！！」

僕は思わず声を上げてしまった

「・・・えつ？何？どうかした？何が・・・違うの？」

「あつ・・い・・いえな・・何でもありませんっ！すみませんっ」

僕はどうじょうもなく狼狽えて 先輩の顔を見る事もできずその場
から逃げ出した

頭を冷やそうとロッジの洗面所で顔を洗つた

冷たい水が気持ちよかつた 濡れた顔をあげた時 目の前に鏡があ

つた

そしてそこに それ が居た

それは白い顔に艶やかな紅い唇でじっとこちらを見つめていた
僕はその顔が自分の顔なのか それ の顔なのか判らなくなつた

僕の中で それ が根を張り始めていた 僕の中に張り巡らされて
いく それ の細い

血管にも似た根であり枝であり触手であり神経であろう その存在
を感じる

それは僕の中にその居場所を作る そして 僕を追い出す事なく
ただ そこにある

ただ そこにある だけなのに それ は僕を脅かす

今まで気づかなかつたもの

聞こえない 見えないフリをして 目をそらしてきたもの
そうしたものたちが 今一斉に僕に押し寄せてくる
人の声だけではない 僕の 自分の心の奥底に密やかに押し込めら
れていた

僕の心の声もが押し寄せてくる

逃げ出した僕は洗面所の床に両耳を手で覆つてしまがみ込んでいた

「大丈夫か?」

そう言つて僕の両肩を抱くよつとして立ち上がりてくれたのはあ
の人だつた

「・・・あ・・先輩・・・」

「急に飛び出して行つたから心配になつて見に来た・・・具合悪い
のか?」

「いえ・・いいえ大丈夫です すみません ホントにすみません」

「謝る事はないだろう ちょっと休んだ方がいいんじゃないかな

肩を貸そう

「はい・・・・・」

僕は先輩の肩に支えられて歩き始めた しかしその足はとても重くて自由に動かない

僕は足をもつれさせてよろけた

先輩の腕が倒れそうになる僕をしつかりと抱き留めてくれた その厚い胸に抱き締められるように倒れ込んだ僕は息が止まるかと思つた

「足 捻つてない？どこも痛めてないかい？大丈夫か？」

僕の顔を心配そうに覗き込む人の顔

「あの・・・このまま・・・このまま少しだけ・・・このままで・・・」

僕は自分の口からこぼれる言葉が信じられなかつた

「ああ」

彼はそう言つて ただそのまま静かに僕を抱き締めていてくれた 恐らく 僕が何かの痛みに耐えているとでも思ったのだろう 彼は何も言わず ただ黙つて僕を支えていてくれた 彼の鼓動が聞こえた それは規則正しく穏やかだつた

8・融合そして再生

彼の肩につかまつて 支えられて部屋へ戻つた

スタッフが数人心配して薬箱やら飲み物やら何やら持つてやつてくれた

丁寧にお礼を言つて 付き添つてくれるといつ申し出を全て断つた

彼らの声が聞こえたから・・・・・
(彼の寝顔見たいなあ・・・・・)
(一晩添い寝したい・・・・・)
(あの唇が・・・・・)

僕は耳を覆いたい気持ちを抑えて 必死の笑顔を作つて彼らを部屋

から押し出した

僕は一人 ベッドに横たわった

天井を見上げていたら 涙が溢れてきた

どうしてこんな風になってしまったのだろう・・・

僕が何をしたというのか・・・

僕の何が罰せられなければならなかつたのか・・・

（鈍感なんだよ 悪気のない鈍感さ・・・） 誰かの声・・・誰？

ふと見ると 部屋のドアを後ろ手に閉める人の姿があつた

「・・・先輩・・・・」

「大丈夫か？ 休めそうか？」

あの人はベッドの端に腰を下ろした

「はい・・・・」

僕はベッドの上に上半身を起こし 彼の顔を見つめた
いつも穏やかな眼差しで 優しい笑顔で それでいて凜々しく逞しい
めつたに実在の人に目標を定めない僕だったが

この人だけは違つた 僕がこうありたいと望む大人の男そのものだ
つたから

「・・・何か・・・何か困つた事でもあるのなら・・俺で力になれる事なら

何でも言つてくれないか 一緒にいい作品を作り上げたいと思う
だから

君が 君が迷う何かがあるのなら 一緒に解決できたらと そう思
うのだけれど・・・」

彼は言葉を選びながら ゆっくりと 僕の顔を正面からしつかりと
見据えてそう言つた

誠実な彼の心が伝わつた

（君は・・・君は愛すべき鈍感さで 嘘は無いの人に人を悩ませる

苦しめる・・・()

「・・・えつ・・・」

僕は思わず声をあげた

彼はただ黙つて微笑んでいた そして静かに頷いた まるで僕の心が判るように

「・・・鈍感・・・ですか?・・僕・・・」

小さく呟いた僕に答える代わりに 彼はそっとその唇を僕の唇に重ねた

9・山頂にて

「それが君の魅力でもある・・かな(笑) 天然なんだろ きっと彼は口づけの後 笑いながらそう言った

「・・・鈍感だなんて・・・思つてもみませんでしたよ・・・」

「まあ・・・それがいわゆる鈍感ならではだろ(笑)」

「あつ・・・そ・・・そうですね・・・そうです・・・その通りです」

僕はあまりにも自分が情けなくなつて 続ける言葉が見つからなかつた

「あの日 あの合宿の吹雪の中で 僕は夢を見たんだ」

彼はゆっくりと話し始めた

「最初 君が目の前にいるんだと思った それ程あいつは君にそつくりだつた

でもあいつが俺に向かつて笑つた時 君じやないとすぐに気づいたよ あいつの笑い方は君とは違う 君の明るくて無邪気な笑顔とは全く正反対の

挑むような試すようなとても挑戦的な笑い方だつた・・・

彼の話はこうだ

あの幻だつた山小屋に確かに毛布にくるまつて座り込んだと思つた
あの場所で

彼は僕にそつくりな それ を見たのだそうだ

それは彼に囁いたそだ（隣りの眠り姫はお前の想い人か？）と
彼は その通りだ と答えたそだ

すると それはその紅い唇をつり上げて嬉しそうに微笑むと
(それなら 眠り姫にも本当の目覚めをプレゼントしなくてはね)
と言つたそだ

そして 彼に冷たい口づけをした 彼はその後の記憶がないそだ

僕が それ を見て 言葉?を交わしたのは彼が意識を失つた後だ
つたのだろう

それは僕を眠り姫と言つた?そして眠り姫の目覚めを僕に?
僕が聞こえるようになった 人々の心の声 それが本当の目覚めだ
と言つのか?

それならあまりにも残酷で辛すぎる目覚めじやないか・・・
僕はこの目覚めの後に 一体何をすればいいんだ どうやつて生き
てゆけばいいというのだ?

唇をかみ締めてみたものの 溢れる涙をこらえる事はできなかつた

そんな僕を彼はそつとその胸に抱き寄せてくれた
彼の胸に顔を埋めて僕はひとしきり声を押し殺して泣いた
涙が次から次へと溢れて止まらなかつた
彼はただ静かに僕をその胸に抱き締めていてくれた
彼の胸の鼓動は静かでかわらず穏やかだつた

しばらくして 僕のしゃくりあげるような肩の震えも治まつた頃
彼は静かに僕の顎を掴み その顔を上げさせた
僕の目の前に少し見上げる高さに彼の端正な顔があつた
「大丈夫・・・俺がついてるから

彼はそう言つて、僕の頬に伝つた涙の後に優しくその唇を這わせた
そして、僕は彼の胸の厚みを感じながらその重みを受けとめる様に
ベッドに身体を沈めた

10・そして

「俺は君が・・・鈍感な眠り姫が田を覚ましてくれてとてもうれしいよ」

彼は軽く笑いながら言つた

そう言いながら、彼の手は、僕のシャツのボタンをひとつずつゆっくりと外してゆく

「あ・・あの・・僕は・・その・・」

僕の言葉は彼の唇に遮られる

そうしながら、いつしか僕はすっかりと身につけていた物を剥ぎ取られ

彼の視線を痛い程にむき出しの肌に受け

恥ずかしさと、それと同時に身体の芯からわき上がるたまらない期待感で

熱く身体が火照るのを感じていた

彼の唇が僕の身体の上をふざけて遊び回るよつに這い回る
たまらない刺激に、僕の喉はぐぐもつた息を飲む

僕は夢中で彼にしがみつく

彼の首に腕をまわし、彼の唇を求める

彼の熱くたぎつた物が僕の中に押し入つてくる
思わず逃れようと仰け反る僕の腰を強く引き寄せて

彼は強引に僕を深く突き上げた

「・・・はうつ・・」

僕の口から堪えきれずに声が漏れた

僕の身体の中に張り巡らされた それ の触手が さわさわとざわめき

彼の愛撫に震える そして その触手は僕の中で喜びに満たされ 大いなる声を上げる

待ち望んでいたものを 身体中で受けとめる喜びを僕は感じていた これが 僕の本当の目覚めなのか・・・・

僕は目眩く快感の渦に身を投じ 心の奥深くに押し込め 閉じこめてきた思いを

解き放つた 僕は彼を求め 彼も僕を求めた

幾度となく身体を繋ぎ 僕はいつしか白い目眩にさらわれた

僕は白い怪物の腹の中にいた

そこは視界を果てしなく奪う 白一色の世界だった

僕は一人 その白い世界に立ち尽くしていた

目の前に大きな鏡があつた

そこには 僕が映っている

鏡の中の僕は 吞氣でぼんやりとして それでいて高慢で 自分が何も本当の事が見えていない事に気づいてさえいない

鏡の中の僕は 周囲から差し伸べられる無数の手を無造作に振り払い まるで行く手を阻むイバラの蔓を刈り取るよう振り払い 自分でもどこへ行きたいのか判らないクセに ただがむしやらに 前へ前へと進もうとしている

足元にある無数の花々を踏みつけて

それに気づきもせず 自分の見えるもの いや

見たいと思う物にしか感心を示さず

そうやつて前へ前へと進み続けている

ああ・・・あが 「鈍感な眠り姫」 だった頃の僕なんだ・・・

なぜかはつきりとそう感じた

僕は それ が僕の身体の中で溶けてゆくのを同時に感じた
目覚めた僕は それ を受け入れたのか
それとも それは その役目を果たし終えて姿を消したのか
いずれにせよ 僕は新しく生まれ変わったような
清々しい気持ちで満ち足りていた

目覚めると 僕の頭をその腕にのせ

穏やかな寝息をたてているあの人の顔が間近にあった

それは僕をとても幸せな気持ちにしてくれた

僕はそつと 彼を起こさないように そつとその唇に唇を重ねた

少しだけ・・・まだ少しだけ

もしかして また 人々の心の声が聞こえてしまうのではという不

安があった

それでも それはそれでいい とも思った

僕はきっと その声を受けとめて ちゃんとその人にきちんと

僕の気持ちをはつきりと答えていこうと思つた

気づかないふりをするのは卑怯だ

たとえ応えられない想いをぶつけられても 向けられても

僕はそれにきちんと 応えられない という答えをしよう

そう心に誓つた

もう 自分に向けられる視線や様々な思いに怯えて過ぐすのはやめ
よつ

せつかく「目覚めた」のだから

僕は窓から差し込む 雪面に煌めく太陽の日差しを眩しく見つめて
いた

雪山の夜明けは美しかつた

The
e
n
d

(後書き)

読んで下さった皆様 ありがとうございました
ご指摘 ご感想など お寄せ頂けますと今後の励みになります
お時間ございましたら是非 コメントをお願い致します

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5122c/>

山頂にて

2010年10月10日03時44分発行